

平成 29 年度 第 2 回 総合教育会議 会議録（要約）

期 日 平成 30 年 2 月 7 日（水）13 時 30 分から 15 時 00 分

場 所 雲仙市役所別館 3F 防災対策室 1

出 席 者 市長部局

金澤秀三郎市長

教育委員会部局

山野義一教育長、徳永 卓教育長職務代理者、平山田鶴子委員

中村妙子委員、森下祐樹委員

説 明 員 教育委員会事務局

坂本教育次長、小松総務課長、下田学校教育課長、

前田生涯学習課長、久保田スポーツ振興課長、

西川学校教育課主幹指導主事、山本学校教育課指導主事

関総務課課長補佐（記録）

会議日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
 - （1）部活動等の現状と課題について
 - ①中学校の小規模化に伴う部活動運営について
 - ②部活動の指導と教員の超過勤務について
 - （2）児童生徒の学力の現状と課題について
 - ①市内児童生徒の学力状況
 - ②英語力向上に向けた取組
- 4 その他
- 5 閉会

【13:30 開会】

1 開会

2 市長あいさつ

金澤市長 最近、中学生の部活動に関して、少子化による部活動の存続問題のほか、行き過ぎた練習による子どもたちの身体的、精神的な負担や、顧問となる教職員の長時間労働の問題などの諸問題がマスコミでも取りざたされている。

また、新しい学習指導要領の移行期間が来年度から始まる。

雲仙市内の児童、生徒の確かな学力を育成することは、本人の将来の夢を叶える礎(いしずえ)となることはもとより、しっかりとしたひとつづくりがまちづくりにつながり、それが本市の地方創生に結びつくものと考えるところである。

本年度からスタートした第2次雲仙市総合計画においても、「確かな学力を育む教育」を施策の一つとして取り組みを進めているところである。

本日は、このような事情を踏まえ、「部活動等の現状と課題」と「児童生徒の学力の現状と課題」について意見交換を行いたい。

3 議事事項

議事（1）部活動等の現状と課題について

※事務局から、中学校の小規模化に伴う部活動運営について説明する。

金澤市長 事務局より説明があった中学校の小規模化に伴う部活動運営について、ご意見・ご提案をお願いしたい。

徳永教育長職務代理者 我々の時代は部活動が多くあり、好きな部に入部できたが、現在はそれが難しい状況だと感じた。離島部は昔から部活動数、団体競技が少なかったので個人競技に力を入れていた。

雲仙市でも現在バレーやバスケットなど複数の中学校の合同チームがあるので、それができれば一番いいと思うが、移動等にかかる保護者負担が出てくるのは否めない。各学校の中体連担当で話し合い、子ども達にとっていい方向に行けばよい。

中村委員 資料に生徒数の推移がある。小浜中学校に2度勤務しており、平成18年度と平成28年度がそれぞれ勤務の最後の年だったが、この10年の間に生徒数が100名減少している。

最初の勤務時は、各学年3クラスあり部活動も活発だった。雲仙市ふるさと大使になった田中大貴君が在籍していたときは球技が盛んだったが、平成28年は生徒数が減り、部の運営が厳しくなっていた。

教職最後の年に部の改廃に関わったが、協議を重ねた結果3つの部（陸上、サッカー、バスケットボール）が廃部となった。部員・保護者・指導者それぞれの立場でいろんな思いがあるので、顧問の教員もサポート面で苦しかった。子どもたちは一生懸命したい、親は頑張ってほしい、指導者は時間をかけてやりたい、教員は部活動を担当したいが、時間に制限がありできない。他の中学校も部活動の改廃が出てくるのではないかと思う。

森下委員 5年程前まで、22年間南串中学校の陸上部の指導をしていた。中村委員が南串中学校にいた時は全国大会に出場するほどだった。当時230～240名程全校生徒がいて、オリンピックのボブスレーに出場した宮崎選手の影響もあり最大75名に陸上部員が増えた。顧問の教員1～2名、外部指導者3名の体制だった。旧南高来郡はほぼ外部の方が指導しており、外部指導者の会があった。

何も部活動に入っていない子どもは、他の活動をしているわけでもなく、学校が終わったら家に帰るだけで、そういった子が増えているのが気がかりである。部活動をすることは強制ではないが、何らか参加はしてほしいと思う。

指導者を辞めてからも、部の運営や部員の確保、移動手段について相談を受けている。特に団体競技は練習試合が負担で、ここ数年はバス代も高くなっており、また県外への遠征もあるため保護者の負担が大きい。保護者のなかには部活動をさせたいが、送迎や当番ができないので子どもに入部を勧めないといった例もある。対策を考えたいが、金銭面や休日に自由な時間が取れないこともあり、様々な要因が重なって難しくなっている。

また、一概には言えないが顧問の先生とうまく噛み合った時は成績も良く、学校とのコミュニケーションがとれる体制をつくる必要がある。各学校に部活動振興会があるが、その時の校長先生の考えで運営方針が変わるので、外部指導者も悩まされている。団体競技においては決まった人数が必要なので、合併チームで出場するにせよ運営自体はかなり厳しくなる。

平山委員 以前、瑞穂中学校で廃部になるかと思っていたら翌年に新入部員が加入し、少ない人数で活動しているという話を聞いた。資料を見ながら、廃部にならない為にはどうしたらいいか考えていた。今までは男子、女子という部活動の形になっていたが、今後バレーボールやバスケットボールで男女混合チームは作れないだろうか。顧問の先生と指導者の件でもお互い話をしうまくやっていたらいいと思う。

※事務局から、部活動の指導と教員の超過勤務について説明する。

徳永教育長職務代理者 小学校勤務だったので部活動はないが、社会体育があったので共通点はある。小学校の場合は学校が終わってから 19 時頃まで指導をし、子どもたちを帰して終わりだが、中学校の場合はそれから職員室に戻り翌日の準備をして 21 時頃までは職員室にいるという話だった。中学校の先生は 6 割が過労死ラインの月 80 時間を超えているという話があったが、どうにかならないかと思っている。任されたらしっかり指導をしたいという思いもあるし、次の日の準備をしないといけないという使命感からこのようなことになっているのではないか。

小浜小学校勤務時に、短い時間で効率よく活動し試合で良い成績を収めることが多かったように思う。だらだら長くするよりも、工夫をすることで子どもたちは 18 時 30 分くらいには帰宅していた。長く活動するほど強くなるという考えもあるがそれを改めないと超過勤務の是正、働き方改革にはならない。全県的に取り組まないと徹底されないのでは。

中村委員 現在国の方針を受けて、長崎県や雲仙市でもノー部活デーや家庭の日など工夫をしているが、全ての部活動、全職員、全指導者一斉に休むというのはなかなかできない。外部指導者の場合、仕事が終わってから指導に来るので、ノー部活デーであってもそれまでの繋ぎで顧問が見ていることがある。

中体連も全員顧問制で職員がつかないといけないので、そういった面で悩みが多い。サポートスタッフ、部活動指導員制度導入について、教員が顧問としてついている場合、もし事故やトラブルがあった時に責任の所在が発生してくる。一旦顧問を引き受けたら他の先生に引き渡すわけには行かないので、そこが顧問の教員の苦しいところと思う。

森下委員 私が指導していた時、南島原市の中学校で生徒が練習中に倒れ亡くなった事故があった。その時は休日で外部指導者だけがついていた。何かあった時は顧問の先生も指導者も大変。誓約書を書いたが、形だけで効果はなかったと感じた。

休養日に関しては部活動の種目によって休みやすい部活、休みにくい部活が決まっている。私が指導していた陸上部は 20 年程前から週休 2 日制をとっていた。基本、試合以外の日曜日は完全に休み、中日の木曜日ないし水曜日をフリーの体制をとった。結果は全然変わらないどころが、リフレッシュされて結果が出るようになった。日曜日は学校も部活も休みなので、生徒は本当にゆっくりできる。ほとんどの学校が週 1 日休みを取っていると思うが、そのほとんどが月曜日であり、部活は休みでも学校があるので、顧問の先生も休めない状態。

教員になった教え子は、1 学期間で家族と過ごせた日は 2 日間だったという話を聞いて唖然とした。陸上は走るのにも限界があるので、ウォーミングアップからクールダウンまで 1 時間 30 分あれば終わるが、球技となると、平日 16 時 30 分から 19 時 30 分くらいまで練習しているところもあり、また土日に集中して部活や遠征となってしまう。教員の夫婦でお互いに部活動の顧問をもっている場合、土日は朝から夕方まで顧問でついていて自分の

子どもは祖父母に預ける生活がずっと続いている。

月に何回かは全く部活動をしないと決めないと、休みを促すだけではなかなか難しい。ある小学校のソフトボールクラブは年間 50 試合こなしており、お盆と正月以外の土日はほぼ試合といった状態。

知り合いが整体をしているが、小学生で整体に来ている人がかなり多いと聞いた。小学生のうちから腕や脚も使いすぎて、中学生になって気持ちが薄らいで部活をやりたくない子が出てくる。

協会の役員も文書等で注意をしているが、効果はほとんどないという話。人数が減ると部活動の運営も厳しく、そのなかでも新しい部活を立ち上げようといった相談をされたが、既存の部活の運営に影響があり、結果その部が廃部になったり悪い点もある。今後新しい部活を立ち上げる際には、ハードルを上げて週 1 日の休養日を条件とし指導者、顧問、保護者三者の話し合いのものときちんとした体制をとり、それぞれの負担を軽減するような形をとった部に関しては認めていいのではという考え。これにより他の部活にもいい影響がもたらせればいい。

平山委員 自分の子どもが部活動をしていた時、試合で朝 5 時 30 分に出かけて行ったことがある。教員が指導者だったので、先生が帯同し試合が終わってから通常勤務以上につき合ってもらっていた。実際は指導のみならず、父兄の誘いにも対応していただき、かなりの時間を割いていただいたのだと思った。そのような先生が他にたくさんいるのではないか。学校の休みが土日になり、土曜日にも試合が入ったことにより保護者も仕事を休んで送迎、応援の時間を割かなければならなくなった。これが原因でクラブに入れたくないという保護者もいる。例えば土曜日は絶対に試合を入れない等のルールをつくることにより、顧問も保護者も負担が減る。休養日と同じように何か対策を考えられないか。

金澤市長 事務局からなにか意見はないか。

山野教育長 議題の「中学校の小規模化に伴う部活動運営について」と「部活動の指導と教員の超過勤務について」は、雲仙市の部活動における大きな課題でもある。県中体連および雲仙市中体連では、合同チームで出場できる決まりがあり、後ほど事務局より説明をお願いしたい。

休養日については、教員の働き方改革の一つであるが、実際には子どもや保護者もきつい思いをしている。休養日を設定することによって教員、保護者などの負担も軽減できると確信している。国、県よりいろんな通知・通達が出ているので、これを基に雲仙市でも教育委員会に諮り学校に徹底させることが大事。働き方改革は、指導者の指導法の改革でもあるし、練習時間等の改革でもあると思っている。

下田学校教育課長 合同チームの件について、担当が説明する。

山本学校教育課指導主事 合同部活動には少人数合同と補充合同の2つある。

少人数合同は、人数が足りない同士がチームをつくる。これで、吾妻中・千々石中合同チームが県新人大会で優勝している。

補充合同は人数の多いチームから少ないチームへ人を借りることができる。現在雲仙市では、団体種目では2校までの合同チームを認めている。

今後3校の合同チームについて検討する必要がある、県及び市の中体連へ提案をしていかなければならない。サッカーは男女でチーム結成できるが、まだバレーやバスケットは男女で組むことができない状況。現在、剣道、柔道については、ほぼ団体が組めない。個人戦でも登録をしておけば一発で県大会に進め、県大会でも階級に選手がいなければ1回目の試合が決勝戦となってしまう。

剣道、柔道のほか、テニス、卓球、バドミントン等も個人戦があるので、団体の合同はできない。子どもが少なくなっているところなどに弊害が出ているが、私共の課題でもあるので、検討を重ねていきたい。

金澤市長 課題として、「顧問数と部活動数が同数である学校がみられる」とあるが、顧問数イコール教員数と置き換えてよいのか。

下田学校教育課長 置き換えていい。

金澤市長 吾妻中と千々石中はそれに該当するということか。具体的にはどういう事態が懸念されるか。

下田学校教育課長 今、働き方改革と言われているように、どこの中学校も1つの部活動につき複数の顧問を配置したいという思いがある。どちらかが都合で来れなくなった場合にもう一人が練習に行くことで、それぞれの負担が軽くなる。

国見中は教員数が23名だが、部活動数が14なので、1つの部活に2名配置している部活がある。吾妻中や千々石中は全ての部活に1名しか配置できないので、その先生が全て責任をもって遠征や練習試合についていかなければならず、負担が大きくなっている。

金澤市長 基本的に1部活動に1顧問は必ず存在しているのか。

下田学校教育課長 中体連の試合では教員が監督にならないと出場できない規定になっているので、どの部活も1名は顧問を配置している。部活動は勤務時間外だが、学習指導要領では教育活動の一環と位置づけられているので、4月の中学校の校長先生は、部活動の顧

問を引き受けてもらうために全精力を使われているのが現状。国見中のように 1 つの部活動に複数の顧問を配置することが理想的である。

金澤市長 吾妻中、千々石中は代わりの顧問がいないのか。

下田学校教育課長 代わりの顧問はいない。

金澤市長 具体例として、一部の保護者よりクラブ新設の申出があり、既存のクラブと調整するのに苦慮されているというのを聞いたことがあるが、現状はどうなっているか。

下田学校教育課長 学校には部活動振興会があり、部活動新設について規定を作っている。その学校は 2 年間同好会として活動をしたのちに部として昇格すると校長が認めることができる。校長も外部指導者の方に指導をお世話になっているので、新しい部が立ちあがると他の部の部員数が減ったり、その部の運営に影響を与えるのではないかという否定的な意見がこれまであった。しかし、協議を重ねるうちに子どものニーズに沿ったものをしてもいいのではと変わってきた。

議事（2）児童生徒の学力の現状と課題について

※事務局から、市内児童生徒の学力状況について説明する。

徳永教育長職務代理者 学校訪問をした際に各学校努力をされている様子を見て、年度で違いはあるが結果は良い方向にいつていると思う。全国学力調査も上がってきているし、県学力調査もほとんどの小学校が平均を上回っており、中学校でも半数が平均を上回っている状況。この努力を続けていけば、近い将来、県平均を上回れるのではないかと思う。英語が一番の課題。

中村委員 「聞いて判断する力」が学力の基本だと思っているが、最近の子どもはうまくできでいないのではないかとと思っている。

今回の結果を見ると、聞き取る力はそんなに低くなくしっかりと判断できている。指示、指導の言葉をしっかりと聞き、それを判断してそれを次の自分の行動、課題に移していくことができたなら真の学力に繋がっていく。

森下委員 勉強だけではなく、全体的に聞き取り、理解する力が落ちていると感じている。同じ学年の中でも塾に行っている子、行っていない子の差が出ている。

今の先生は自分が小中学生の時と比べて丁寧な言葉で、すごく親切に指導をされている

と思う。先日の愛野小の学校訪問で、どんどん発言する子もいれば発言はしているが声が小さい子もいる。それは個人の性格もあるので違っていても当たり前だが、先生達がこつこつやってきた結果が数字に表れていると思う。また、先生によって児童生徒の授業態度や積極性に差が出てくるのではないかと。授業内容だけではなく、普段の部活動等でのコミュニケーションがうまくできてくると授業にも影響が出てくると思う。

平山委員 先生と生徒の頑張りが結果に繋がったのではないかと。小学校はいい結果が出ており、それが中学校になって変わってくるというのは良い成績をとる児童が他の学校に行くことが大きいのではないかと。英語が低い原因について考えた時に、都心は小さい頃から英語や外国語を習わせたいといった保護者が多くおり、塾などに通わせているのではないかと。雲仙市は英語の塾も少ないので、成績も低いのではないかと考えた。

先日の学校訪問で、パソコンを利用して授業をしているのを見た時、授業以外にパソコンで英語を聞く機会があれば成績向上に繋がらないかと。

※事務局から、英語力向上に向けた取組説明する。

中村委員 ALT を各町 1 名ずつ配置できると聞いたが、生の英語に触れることはとても大事。教員も授業が詰まっているので、ALT と十分に打ち合わせて授業に臨むことが少なかったように思う。生徒は ALT とすれ違うと気軽に英語で挨拶をしているので、もっと ALT を活用していけたらいい。

森下委員 生の英語は大事。英語に慣れて耳から自然に入ってくるのが効果的。学校で習う決まった文法など実際話せるかといったら、それはなかなか難しい。外国人の先生は教室に入ったときから英語で話すので、日本人の先生と比べて授業の内容や雰囲気は違うのではないかと。先生同士でもうまくやれたら、生徒たちもどんどん楽しくなっていて、英語が好きになるのでは。英語に限らずどの教科もだが、最初に失敗してしまうと敬遠しがちになる。特に小学校のうちに英語が好きになるように仕向けることができれば、中学校に行ってもスムーズに授業に入れるのではないかと。

徳永教育長職務代理者 英語の「読む書く能力」が特に悪いように思う。理解するだけでなく考えて答えを書くようなことか。

西川学校教育課主幹指導主事 「読む書く能力」とは、長文をしっかりと読み取ってそれを実際の英文で書くことで、思考が深い問題。本市の子どもたちはそこが弱い。

徳永教育長職務代理者 英語も言葉なので、国語力が大きく関わると考えた。国語につい

でも本をよく読んでいるのか、また読む時間があるのかに関わってきて、長く部活に時間をかけると帰ってからの自学の時間が取れない。

山野教育長 ALT の増員について、市長の了解を得て 30 年度の予算に計上している段階である。

金澤市長 成績には「学校間の格差」とよく言われるが、母数が少ないので一人飛びぬけて成績の良い生徒がいたり、また反対のケースがあったりする。
各自治体で同じように評価をすると思うが、前年と比べて学力が向上されている、維持されている、低下した等評価をしたときに、どう判断しているか。

下田学校教育課長 資料に県学力調査の結果を学校別になっている。赤が県平均を上回っており、本市の小学 5 年生は、国語も算数も県の上位であるが、そのなかで赤がついていないのが 4 校ある。この学校はこれまでの状況を比較したときに、例えば A 小は、昨年は 1 名で満点近い点数だったが、今回の 5 年生は 2～3 名の集団だったのでその分低下した。学年としての集団の差はある。他の 3 校はこれまでも平均を超えることができない学校で、これが学校の二極化となっている。

ただ、学校は一生懸命やっているが結果として出てこないのがもどかしいといった状況。市の独自の学力調査を小学校 2 年生から中学校 2 年生まで始め、現在 2 年目なので今年ようやく昨年との個別の比較ができるようになった。長い目で見て、最初成績が低かった子どもが少しずつ伸びていく姿を見させてあげたい。まずは一人ひとり見ていこうと学校に言っているので、それが学校としての成績に繋がる。

金澤市長 母数が少ないから、上下があるのは当然分かるが、4 年くらいのスパンで見て全体的な評価を下しているといったことでいいか。

下田学校教育課長 そうです。

【15:00 閉会】